奇跡の正しい使い方

二模羽作

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
奇跡の正しい使い方

【Ｎコード】
Ｎ００８４Ｙ

【作者名】
二模羽作

【あらすじ】
　古代数秘学者、ピタゴラスは言った。「世界の全ては数でできている」と。
　古代物理学者、デモクリスは言った。「世界の全ては原子でできている」と。
　そんな世界で彼、阿智良　湊（アチラミナト）が出会ったのは戸屋盛　茜（トヤモリアカネ）という【奇跡】を使用した人物だった。
彼女の行いは、オリエントと世界を巻き込む崩壊の起爆剤だった。

エブリスタの汚点を修正して展開、設定を変更しての投稿となります。エブリスタのほうでも同じタイトルです。処女作という事で出来は悪いですが楽しんでいただけると嬉しいです。

オリエント戦地（前書き）

使っている機種の性能が低いのか、段落のはじめに空白を入れる事が出来ません。ご了承ください

オリエント戦地

　両手に下げられたスーパーのビニール袋。中には母から頼まれた野菜や卵が入っており、見た目に反してさほど重量は無い。
　その中で帰りの近道という事で賑わっていた大通りから外れて薄暗い路地のほうへとむかって行く。その通りから真っ直ぐ抜けたところにそれはあった。

　ーーオリエント戦地。

今から大凡（おおよそ）二千年前。天使と悪魔による大規模な戦争が起こり、それの戦場としてここが使われ、現在まで大きな爪痕を残し、その戦争の被害の大きさを物語っていた。

それは、遥か昔のピタゴラス派の人物と、デモクリス派の人物たちが争ったという説や本物の天使と悪魔による物だという説など、様々な説がある。

　個人的な意見としてはピタゴラス派対デモクリス派の争いが一番怪しいと俺は踏んでいる。

　その激しい荒れ具合、ところどころには大小関係なくいくつもの

クレーターが点々と存在していた。その他にも、途中まで崩れた柱。それにはところどころに綺麗な装飾が施されていた。

「ひどいものですねぇ……」

観光名所とは呼べないほどに荒れ果てた土地に、一つの声が木霊する。

その声に強い引力を感じたのか、俺の顔は進行方向とは全く関係の無い方向。右斜め後ろへと向いた。

先ほどは崩れた建物の影になって見えなかったのだろう、そこに立っていた人物は崩れた建物を見上げていた。

だがしかし、その格好はあまりにもひどい物であった。エナメル質の衣服は局部という局部しか隠されておらずに、綺麗に括れたウェストやスラリと伸びる両足は露出されたままであった。

男の性という物なのか、その女性に先ほどよりも強い引力があるようだ。目は見開いており凝視していると自分でもわかる。

「あ、別に営みの後、というわけでは無いですよ」

誰も聞いてない。

寧ろ俺的には営み後であったほうが嬉しかった。そんな事情も無いのにそんな格好をしているなんて変態の二文字しか浮かび上がらない。

「酷いってここがですか？」

「ええ、どちらにせよこの世界に生ける者によってここまでの被害が出るのですから」

「でも風化などもあるでしょう？」

俺のその言葉を聞くと、彼女は黙り込んでしまった。この悲惨な光景を見ながら口を紡ぐだけ。その姿は戦没者に祈りを捧げているように見えた。

★
☆
★

「あなたはどちら派なんですか？」

唐突に彼女は口を開き俺へと疑問を投げかけた。

「わかりませんね、この世がなんであれどうでもいい事ですから」

「ふふっ」

俺の答えが可笑しかったのか、彼女は妖艶な笑みを浮かべる。

「世界はなにごとも数で表せる事ができるのですよ」

彼女は語り出す。

「カンタンな四則演算から複雑なアインシュタイン方程式までなにもかも。それはまるでピタゴラスの言っていたことに当てはまります」

「そうですね……しかしそれでは世界の全てであるということにはならないのでは？」

彼女は先ほどとは違った笑みを浮かべると少し考え込み始めた。

「そうですねぇ……些か私の言葉が足りなかったですね」

彼女は一人で納得するとちいさく一つの咳払いをした。

数の世界

「よく思い出して見てください、牛乳などの内容量表記は数ですよね？」

俺は肯定の意味を込めて首を縦に振る。

「そうするとです。人間の寿命や体温、エネルギーなどありとあらゆる物事は数が関わり、数が支配しています」

確かに考えてみればそうだ、物理学などにも必ずと言っていいほど計算式を使うし、明るさや音の高低にも必ず数が使われている。

こう言った持論を展開するということは、彼女はピタゴラス派の人間なのだろうか？

「あなたはピタゴラス派なのですか？」

俺の問いに彼女は再び妖艶な笑みを浮かべる。

「いいえ、私はあなたと同じような人間ですよ」

その笑みを浮かべたまま、彼女は月明かりに照らされながら答えた。

「そうなんですか？」

「はい、よく考えて見てくださいよ、確かに数は不変的な物かもしれませんが、物事の量を決める際の値の基準はあくまで私達人間が作り出したのですよ？」

なんというのだろうか、この人は凄い思考回路の持ち主である。ここまでしっかりした考えを持った上で自分とは違った価値観の人の考えを理解できるのだから。

「凄いですね……」

「なにがです？」

俺の漏らした言葉に、彼女は不思議そうに首をかしげたが、俺は「気にしないでください」と言った。

★☆★

突然俺の携帯電話が鳴りひびいた。

「ちょっとすいません」

俺がそういうと彼女はニッコリと笑みを浮かべた。よく笑う人だな。そんな呑気な考えは電話の向こう側にいる人物によって吹き飛ばされてしまう。

「はいもしも……」

『もしもしじゃないわよ馬鹿ぁぁ！！』

その耳をつんざくような高音が大音量で鳴りひびいた。ハンズフリーにした訳でもないのに、彼女までも聞こえていたようだ。

今回ばかりはさすがの彼女も苦笑いをしていた。

『なんで湊君は学校帰りでスーパーに寄るだけなのに生徒会で残ってたあたしよりも遅いわけ！？』

俺は携帯電話から耳を離しているというのに、通常の状態と同じように聞こえてしまう。それ程までに電話の向こうの相手が怒り心頭なのだと察する。

耳を離したついでにメインディスプレイで時間を確認するとすでに七時となっていた。これから俺が帰って飯を作るなんて事になってしまえば夕飯は八時を超えるだろう。

「うわわわ！ご、ごめん結衣（ゆい）！！す、すぐ帰るから！！」

そのまま、結衣に電話を切られてしまう。

「ごめんなさい！！俺もう帰ります！！」

俺は彼女に何度か頭を下げながら家の方向に向けて走り出した。彼女はにこやかに笑みを浮かべると俺に手を降ってくれた。

あ、名前くらい聞いておくんだった。

崎川　結衣

家についたのは八時を五分ほどすぎた時間であった。今は玄関前で鍵を出そうとしているのだが、結衣の恐怖からか手がガクガクと震えているのが感じ取れた。

すぐに見つかった鍵。キーホルダーとしてつけている立派な黄色い眉毛を生やすペンギンがなんだかいつもより眉を顰（ひそ）めているような気がしてならなかった。

ガチャリと重たい音を立てながらロックが解除される。左手に集中した荷物の重みでビニール袋が手に食い込むのだが、今はそんな事気にしていられない。

「た、ただいま……」

何故かいつもは脱ぎっぱなしであるはずの靴を綺麗に向きを揃えて整えた。

この短い廊下の左側に結衣がいるであろう居間に繋がる扉があるのだが、そこ個からは真っ黒なオーラが流れ出ていると雰囲気で感じ

取る。

これ程までにドアを開ける事に対して恐怖感を抱いただろうか、否、一度もない。だが、開けない事にはこのさっきから鳴り響くこの腹の虫が収まらない。

意を決して、ドアノブをしたたに下げてから手前にグイッと扉を引く。気温差は無いはずなのに開けた途端に俺の体の体温が下がった気がする。

空気量は変わらないはずなのに、空気が重くなった気がする。

体重が増えたわけでも無いのに、足取りが重くなった気がする。

「結衣？」

その恐怖の根源である人物の名を呼びながら怯えた子犬さながらにふるえながら居間へと侵入する。

いつ、どこから出てくるかもわからない、不思議な事に明かりのついた自宅で気分はお化け屋敷にいるようだ。

「さ、崎川結衣（サキカワユイ）さん？」

なぜか、今のどこにも結衣の姿は見当たらなかった、電気がついていたからそうなのかと思ったのだが、見当違いなようだ。

しかしだ……

俺の後方より、扉の空く音がする。それは俺の心臓を高鳴らせる要素としては十分すぎた。

「湊君？」

女性の声にしてはすこし低い声がする。掠れたような声にはあからさまな怒気が含まれており俺の顔を振り向かせてはくれなかった。

「ただいま戻りました……」

額から嫌な汗が流れ始め、口の中の水分が急激に蒸発する。

「他にいう事は……ないの？」

無いの？の部分ではワザと声にドスを聞かせていた。格好悪くも俺の口からは短い悲鳴が漏れた。

「遅れて申し訳ありませんでしたぁ！！」

俺は結衣の方へと向き直り、顔を見るのは怖い為そのまましゃがみこんでフローリングの床に額を打ち付けるようにして下ろした。

「そうだなぁ～家賃無しにしてくれるならいいよ」

「いや、まてまて、それはお前があの時……」

「あの時何だって？ご飯食べたくないならいいよ？」

俺は知っている、彼女、崎川結衣の笑顔にはいくつかの意味があり

今回は、それが脅しをかける時の黒い笑顔だという事を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0084y/

奇跡の正しい使い方

2011年10月30日00時11分発行